電撃文庫
超感謝フェア2019
夏の陣
ソードアート・オンライン
特別書き下ろし掌編小説
『夏の思い出』
川原 礫
イラスト/abec

夏の思い出

　アンダーワールドには、筋力(STR)や敏捷力(AGI)といったステータスは、少なくとも目に見える形では存在しない。
　体力を表すのは、ステイシアの窓に表示される《オブジェクトコントロール権限》の数値のみ。たとえば、OC権限が9以下の人間がクラス10の剣を持つとまともに振れないほど重く感じるし、逆に権限が20を超えていたりすると木剣のように軽く感じる。
　俺のOC権限は、五ヶ月前に果ての山脈の洞窟でゴブリンの大集団を撃退したことで48にまで上昇した。これは平民としてはほとんど有り得ないほど高い数値で、おかげで大抵のものを軽々と取り扱えるようになったのだが、だからといって農場仕事が鼻歌交じりにこなせるかというと、そういうわけでもない。

「よい……しょっと」
　井戸から引っ張り上げた木桶になみなみと湛えられた水を、傍らの大桶に流し込む。直径六十センチ、高さ八十センチ近い大桶をいっぱいにするには、この作業を三十回も繰り返す必要がある。蛇口を捻ればいくらでも水が出る生活を送ってきた俺にとっては実にまだるっこしい作業なのだが、これがウォルデ家の一日の生活用水になると思うと手を抜くわけにはいかない。汲み上げ桶を井戸の側面にぶつけて水にゴミを混入させてしまわないよう、気をつけて仕事を続ける。
　俺とユージオが住み込みで働き始める前は、この大桶は母屋の台所に固定されていて、双子のテリンとテルルが毎朝裏庭の井戸から木桶一杯ぶんずつ水を運んでいたのだという。二人がかりでも三十往復するのに一時間かかると聞いて、俺は大桶を裏庭まで運び、そこで水を満たしてから台所に戻す作戦を採用したわけだが、正直もっと効率のいい方法があるだろうと思えてならない。
　俺がこの世界の支配者となった暁には、可及的すみやかに上下水道を整備してやるのだ……などと考えながら大桶に八割がた水を溜めた時だった。
「うわーっ、今日は暑いねえ！」
　背後からそんな声が聞こえて、俺は満水の木桶を持ったまま振り向いた。
　歩み寄ってくるのは、右手に飼い葉すき(ピッチフォーク)を携えた亜麻色の髪の青年。我が相棒ユージオだ。長めの前髪には汗の玉がきらきらと光り、生成り麻(きなりあさ)のシャツの前身頃(まえみごろ)もしとどに濡れている。確かに今日は気温が高めだが、温暖化著しい日本の酷暑に比べればさほどのことはない。かたやユージオは人界の最北端にあるルーリッド村で生まれ育ったので、夏の暑さが得意ではないのだろう。
　ふとイタズラを思いつき、相棒にニヤリと笑いかける。
「なら、俺が一瞬で涼しくしてあげよう」
　途端、緑色の瞳が警戒するように瞬(しばた)かれる。
「……まさか、凍素術を使うつもりじゃないだろうね。みだりに神聖術を使ったことがザッカリアの衛兵に知られたら、剣術大会の参加資格が……」
「いやいや、そんな迂遠(うえん)な手は使わないさ」
　笑顔のまま歩み寄り、体の後ろに隠していた木桶を高々と掲げると、ユージオの頭上でひっくり返す。冷たい井戸水がざんぶりと降り注ぎ、相棒が飛び上がる。
「ぷわっ！」
　頭から滝のように水滴を垂らしながら、たっぷり三秒以上もフリーズしていたユージオの顔に、少しずつコワい笑みが浮かび上がった。右手のすきを近くの木に立て掛け、俺の手から空の木桶を引ったくると、井戸にすたすた歩み寄って放り込む。どぷんと水音が響くや、滑車に通されたロープを引き始める。俺と同じレベルのOC権限を持っているだけあって軽々と木桶を引き上げると、それを両手で抱えて再び俺を見る。彼の意図は明らかだが、ここは甘んじて受け止めねばなるまい……相棒として。
「お礼に、僕もキリトを涼しくしてあげるよ」
　上からではなく斜め下方から襲ってきた水の塊は、俺の顔面で爆発して微細な雫を無数に散らし、ウォルデ農場の裏庭に小さな虹を作った。

KADOKAWA